

持続可能な社会づくりのための授業開発 —小学校5年生 社会科「森林とともに生きる」—

内山 隆*・澤田 康介**

Development of teaching materials to promote the creation of a sustainable society
– Fifth grade social studies: ‘Living with Forests’–

Takashi UCHIYAMA*・Kosuke SAWADA**

Abstract

This study aims to explore the effectiveness and challenges of the ‘perspective of developing teaching materials to promote the creation of a sustainable society.’ For this purpose, The authors analyzed and discussed the development and practice of lessons for ‘Living with Forests’ of fifth grade social studies, and examined the effectiveness and challenges of the lessons.

We reached the following two findings: by focusing on the ‘perspective of developing teaching materials to promote the creation of a sustainable society’ matrix, (1) children were able to obtain a variety of perspective on the use of local timber and to think about the relationship between its use and their daily lives, and (2) children developed ideas about what a sustainable society should be like, and how they should achieve the goals of the unit. As identified in the analysis of teaching materials, it is a challenge to describe and visualize the efforts to create a sustainable society in the unit plan and the lesson plan as the children’s behavior to pursue knowledge.

Keywords : the creation of a sustainable society, developing teaching materials, social studies

1. はじめに

改訂された学習指導要領の前文で、「これからの学校には、(中略)豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」が示されている。¹⁾

内山は、「持続可能な社会づくりの教材開発の視点」について、国連を中心としたE S D (持続可能な開発のための教育)や日本における地方消滅や地方創生の議論を踏まえ、典型教材としての汎用性ある教材開発の視点を研究した。金子勇の「汎用性に富む地方創生論」を手がかりに、以下の持続可能な開発の縦軸となる5つの視点を明らかにした。^{2)*1}

「自然環境・生態系・循環」「産業・技術・経済」「政治・行政」「生活・情報・教育・分化・芸術・歴史」「リーダーシップ・中間集団・参加協働」^{*2}

これに横軸として「成長」(経済的・技術的な面)と「改善」(社会的・文化的な面)を加えて、次ページ表1のマトリクスを開発した。^{*3}

このマトリクスの特徴は、まずそれぞれの視点からマトリクスの項目に従って記入し、記入した内容が相互に関連性をもって「点から線を経由して面へ」の広がりを持っているかどうかを考察することで、汎用性があることを可視化できるところにある。^{*4}

このことで、教材そのものの汎用性を明らかにすると同時に、内容相互の関連性が可視化できることから、「主

体的・対話的で深い学び」の「深い学び」について、教材研究の時点で想定できる。

この研究では、具体的な単元開発や授業実践と評価については課題として残されていたため、本研究ではマトリクスを活用した授業開発と実践をすることにした。

2. 研究の目的と方法

本研究では、「持続可能な社会づくりの教材開発の視点」の有効性と課題を明らかにすることを目的とする。

方法は、小学校5年生「森林とともに生きる」の授業開発と実践の分析・考察を通して検証することとする。

3. 「持続可能な社会づくりの教材開発の視点」を活用した授業構想

<3.1> 「北海道釧路市の森林」の教材分析

釧路市は、水産業や炭鉱業のイメージが強いが、平成17年の市町村合併により全国でも指折りの「森林都市」となった。森林面積は全道で1位、人口10万人、森林面積10万haを超えるのは全国で3市のみである。森林の概要は、令和2年3月の北海道林業統計によれば以下のとおりである。

- ・釧路市の総面積 136,329ha
- ・森林面積 100,571ha
- ・総面積に占める森林の割合 74%

下の表1のように、釧路の森林資源を「持続可能な社会づくりの教材開発の視点」から分析し、授業開発に取り

組んだ。

マトリクスを作成して見えてきたのは、「釧路森林資源活用円卓会議」及び「くしろ木づなプロジェクト」の存在である。その目的は、「地域の木材の需要拡大と循環を進めること」で、「森林から生産される木材等の収益が森の創出を図る」³⁾ことであり、まさに縦の視点である「自然環境・生態系・循環」「産業・技術・経済」「政治・行政」「生活・情報教育・文化・芸術・歴史」「リーダーシップ・中間集団・参加協働」が点から線へ、面へとつながり、成長・

改善をもたらそうとしていることが分かる。⁴⁾

このことと、学習指導要領解説における小学校5年生の森林資源の働きに関する内容である「森林資源の分布や働きなどに着目して、地図帳や各種の資料で調べ、ま林の整備や保全に再び向け」、「森林・林業の再生や森林資源の循環利用」へとつなげ、「地域経済の活性化、雇用とめ、国土の環境を捉え、森林資源が果たす役割を考え、表現することを通して、森林は、その育成や保護に従事している人々の様々な工夫と努力により国土の保全など

表1 教材分析「北海道釧路市の森林」(内山・澤田作成)

視 点	成 長	改 善
自然環境・生態系・循環	○森林面積 10 万 ha 以上。人口 10 万人以上の都市では、全国に3市のみ。	○定期的な間伐による森の循環。
産業・技術・経済	○2010 年に発足した地域の木材の需要拡大とその循環を進める「釧路森林資源活用円卓会議」(林業・木材産業関係者、工務店、設計士、エンドユーザー、研究者、行政等が構成員。座長は丸善木材社長の鈴木氏)で議論。川の「上流」(木材産出側)、「下流」(販売・施工業側)まで幅広い関係者が同じテーブルで木材利用の促進を語り、情報と認識を共有する。 ○「くしろカラマツ」の合板商品開発。保育施設や商店等で建材として活用。新国立競技場でも屋根の根元にカラマツを使用。 ○「円卓会議」での議論を元に「木づなプロジェクト」で様々な取組。	○スポーツ施設の椅子、会議机、学校机、フローリング、カヌー等の生産。 ○担い手の確保、育成。 ○釧路市内小・中学校の施設の建設。
政治・行政	○木材産業の発展と地産地消の推進、HPによる発信(産業振興部)	
生活・情報・教育・文化・芸術・歴史	○木材供給側から需要側まで幅広い関係者が集まり地域材の需要拡大とその循環を進めている「釧路森林資源活用円卓会議」の10周年の取組として「くしろ木づなフェスティバル」が行われる。道内の企業・団体・大学の参画による木育や各種体験プログラム、林業機械実演など、地域の資源と技術、産業の認知向上に寄与する継続的な活動が評価され、2020年「ウッドデザイン賞」を受賞。	○「くしろ木づなフェスティバル」(木育ひろば、木工体験、山のしごと展、木づなステージで構成)を実施し、地域住民に木を「見て、触れて、感じて」もらうことで、林業・木材産業への理解を深め関心を高める取組を行った。 ○木育教室(子供、大人対象)の実施。 ○釧路市産業振興部農林課による出前授業、丸善木材による社会科見学の受け入れ。
リーダーシップ・中間集団・参加協働	○「くしろ木づなフェスティバル」へのNPO「地産地消くしろネットワーク」、一般社団法人「前田一歩円財団」等の協賛。市民の出席。	○「円卓会議」での議論をもとに、釧路市役所と連携し、林業体験を実施。次世代の担い手が育つ。

重要な役割を果たしていることを理解できるようにすることを重ねて指導計画を作成した。

下の図1のように、釧路市では「産業・技術・経済」が「政治・行政」と協働して、森林という「自然環境・生態系・循環」を活用し、幅広い関係者が「円卓会議」で議論して木材の利用促進を図り、情報と認識を共有している。また、「円卓会議」での議論を元に「くしろ木づなプロジェクト」を通して、地域住民やNP0等と連携して「木づなフェスティバル」や木育教室といった住民の参加協働へと面的な広がりを生み出してきていることを表している。

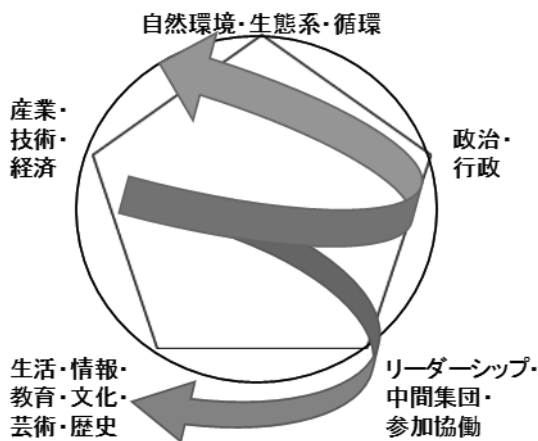


図1 釧路市の持続可能な林業への動き（内山作成）

＜3.2＞ 授業構成と手立て

以上の教材分析を踏まえた上で、小学校第5学年社会科の小単元「森林とともに生きる」において、授業実践を行うこととした。

森の手入れが追いつかない現状や後継者不足などの林業が抱える課題について自分事として捉えて学習するために、単元に2つの学習問題を位置付けた。

学習問題1：日本には豊かな森林があるのに、なぜ林業に関わる人は心配をしているのだろうか？

学習問題2：日本の林業を守り続けるためにどうしていけばよいのだろうか？

学習問題1を通して子どもたちは、日本には豊かな森林資源があることに気付く。さらに釧路では、日本の中でも特に豊かな森林資源があることを学ぶ。しかし、丸善木材の方や釧路市役所産業振興部農林課の方の話を聞く中で、日本全体で後継者不足により森林が荒れている現状を理解する。学習問題2では、その課題解決のために、「釧路森林資源活用円卓会議」及び「くしろ木づなプロジェクト」について追究すると共に、解決策を構想する場を設定する。単元の終末には、市役所へ解決策を提案し、振り返りを行う。

4. 授業実践の実際

＜4.1＞ 授業の実施

授業対象者は北海道釧路市内の小学校第5学年児童20名である。実施期間は令和4年2月14日から令和4年3月1日である。

＜4.2＞ 単元目標

森林資源の分布や働きに着目し、森林資源の果たす役割や保全していくことの大切さを考えるとともに、森林の育成や保全に従事している人々の営みを通して、その工夫や努力を捉え、森林を保全・活用していくために自分にできることについて考えようとする態度を養う。

＜4.3＞ 単元計画（6時間扱い）

「持続可能な社会づくり」が求められていることを踏まえ、森林を保全していくことに加え、間伐材などの木材を活用していくという視点を取り入れて単元を構成する。木材を生かしていく視点を取り入れることにより、林業に携わる人たちの保全する見方だけでなくとどまらず、「木づなプロジェクト」のように木材を加工した製品ができるまでに多くの人が関わり、工夫や努力があることを思考・判断することで、身の回りにある木材製品を大切にするという思いを深めることをねらいとした。

ここでは、単元の学習の実際について、本単元のキーとなる第4時と第6時における授業の考察をする。本研究では、表1のマトリクスの特徴に照らし合わせ、内容が点から線へつながる場面が第4時、線から面へ広がる場面が第6時にあたるため、この2時間を取り上げることとした。なお、コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインで「釧路森林資源活用円卓会議」や「くしろ木づなプロジェクト」に携わる木材店を営む丸善木材と釧路市産業振興部農林課の方とのやりとりを位置付けた。単元計画の全体像については、以下に示す通り全6時間の単元として構成した。

【 】主な問い ☆見方・考え方 ○学習活動

① 【問い】日本の森林には、どのような特徴があるのだろうか？

☆日本の森林の特徴を日本の国土の場所や広がりに着目して捉える。
・日本に森林資源が多くあるにも関わらず、林業従事者のインタビューをもとに心配事や悩みがあることを知る。

学習問題1 日本には豊かな森林があるのに、なぜ林業に関わる人は心配をしているのだろう？

② 【問い】森林の多い場所にどんなよさがあるのか？

☆森林の働きと海を豊かにすることの相互関係に着目して捉える。
☆森林がある状態とない状態を比較する。
○森林がある場合とない場合の資料を比較すること

を通して、森林の働きや暮らしを支える働きがあることを説明する。

- ③ **【問い】森を大切にしている人が、どうして木を切っているのか？**

☆林業従事者の仕事と森林の働きを関連付ける。
○間伐が森林保全につながることに、林業従事者へのインタビュー映像をもとに説明する。

学習問題 2 日本の森林を守り続けていくためにどうしていけばよいのだろうか？

- ④ **【問い】なぜ外国産の木材よりも手間がかかるのに、釧路産の木材を使っているのか？**

☆釧路産の木材で作られた机と生産活動を関連付ける。
☆林業従事者の取組と森林の保護を関連付ける。
○インタビュー映像・資料をもとに、林業従事者(丸善木材の鈴木さん)が釧路産の木材を扱う思いやこだわりを説明する。

- ⑤ **【問い】林業従事者の方の心配事や悩みは解消されたのか？**

☆企業や地方公共団体のつながりに着目する。
○釧路市産業振興部農林課の神成さんの話をもとに、林業家と協力して森林を保全したり、支援したりする取組を知る。
○これまでの振り返りを活用しながら、「企業」「国・地方公共団体」に加え、「自分」へと対象を広げ、次時の学びへとつなげる。

- ⑥ **【問い】森林をもっとよりよくしていくために、私たちは何をしていけばよいのか？**

☆「わたしたち」「生産者(釧路の産業)」「市・国」などの森林に関わる様々な立場を関連付ける。
○丸善木材の鈴木さんや釧路市役所産業振興部農林課の神成さんとのやりとりを踏まえ、課題の解決策を構想する。
○森林に関わる様々な立場を関連付け、森林を保全・活用に向けた自分の考えを記述する。

<4.4> 本単元の学習の実際

【第4時】「なぜ外国産の木材よりも手間がかかるのに、釧路産の木材を使っているのか？」

本単元の第4時は、「釧路産の木材で作られた学童机・椅子」と「釧路産木材への誇り」・「森林保全のための生産者の営み」を関連付けることで、釧路市の豊かな森林資源を点から線へと結びつけていく場面である。釧路管内にある株式会社丸善木材に勤める鈴木さんを取り上げた。丸善木材では、釧路産の木材を中心に扱い、釧路管内のみならず全道の遊具なども手掛けている。

導入場面で、釧路市内全校で使用されている学童机椅子が釧路産の木材で提供されていることを確認する。しかし、釧路産の木材を使用することは簡単ではない。輸入された木材は加工されてすぐに使用できる状態(加

工材)で日本に届くのに対し、釧路産の木材を使用するためには、丸太から加工材にするために2週間ほどの時間がかかる事実を伝える。そこで、「手間がかかるのにもかかわらず、どうして釧路産の木を使用しているのか」という疑問をもとに本時の問いへとつなげた。

展開場面では、生産者側である丸善木材の方や消費者である釧路産の木材の商品を使用している人のインタビューを資料として提示することで根拠をもって自分の考えを述べられるようにした。また、「地元の木を使うとどんなよさがあるのかな？」と問い返すことで、インタビューと釧路産の木材を使う理由を関連付けて考えることができるようにした。本時では、以下のような子どもの記述や発言が見られた。

- ・「釧路産の木材で作られた学童机・椅子」と「釧路産木材への誇り」を関連付けている。(8/20人)
- ・「釧路産の木材で作られた学童机・椅子」と「森林保全のための生産者の営み」を関連付けている。(3/20人)
- ・「釧路産の木材で作られた学童机・椅子」と「釧路産木材への誇り」・「森林保全のための生産者の営み」を関連付けている。(9/20人)

こうした傾向から全ての児童が生産者である鈴木さんとの出会いを通して、釧路産の木材への誇りや生産者の営みと関連付けられ、点から線へとつながりを見出せたと考える。実際には、以下のような子供の記述が見られた。次ページ表2に第4時の学習指導案を示した。

- ・「釧路産木材への誇り」を関連付けた児童
今自分が使っている家具が、「釧路の大切な宝の木材」と知ったので、木材を大切に、永遠に木を守りたいと思いました。【抽出児 A】
- ・「森林保全のための生産者の営み」を関連付けた児童
釧路の木を活用する、手入れをするという取り組みを繰り返していけば、木を永遠に未来へと受け継いでいけると感じました。【抽出児 B】
- ・「釧路産木材への誇り」・「森林保全のための生産者の営み」を関連付けた児童
私は、釧路の木で作られた椅子や机を使うことで、釧路の木に興味をもちました。私と同じように、手入れた釧路産の木材の製品を使うことで、よさを知ったり、林業の体験をしたくなったりする人もいられるかもしれないですごくいいと思いました。【抽出児 C】

【第6時】「森林をもっとよりよくしていくために、何をしていけばよいのか？」

過程	主な学習活動	教師のかかわり◇評価
つかむ	1. 外国産と釧路産の木材を比較して、手間の違いに着目することで新たな問いを生む。  【外国産】輸入してからすぐに使うことができる  【釧路産】使えるまでに何日もかかり、何十人も関わる どうして、大変な思いをして、釧路産の木材を使っているのかな？	□児童が本時までに調べてきた学習問題に対する予想を可視化する。  釧路では、木を使う取組の一つとして机と椅子を釧路産の間伐材を活用していると聞いたよ。 ○外国産と釧路産の木材を比較して、釧路産の木材は手間がかかることを伝えることで問いへとつなげる
なぜ外国産の木材よりも手間がかかるのに、釧路産の木材を使っているのだろう？		
調べる・考える	2. 既習事項を手がかりに、丸善木材が釧路産の木材を使用している理由を予想する。 ・釧路の木をPRしたいのかな？ ・間伐して使わなきゃいけない木が多いから、それを使っている？ ・釧路には森林がたくさんあるから、使っていけないと、手入れができないのでは？ 3. インタビュー映像・資料をもとに、問題を解決するとともに、丸善木材の鈴木さんが釧路産の木材を扱う思いやこだわりを知る。  【つくる人(丸善木材・鈴木さん)】 ・おじいちゃん・おばあちゃんが育ててくれた宝(木)を使っていく。 ・加工することで、木は生まれ変わる。(木は2度生きる) ・地元のを地元で使ってほしい。釧路の気候に合っているので頑丈・風に強い。(地産地消) 災害から命を守る 日本の森を守る 釧路の森を受け継ぐ 【森林を守る】 ・間伐材を使用することで森林の手入れが進む。 ・木材を使用した分、新たな木を植えることができる。 ・「間伐して、また植える」を繰り返すことで永遠に宝(木)を残していく。 4. 釧路産の木材を使用することが後継者不足の解消につながるかどうか話し合う。 ・釧路の木で作られたものを使うと興味がわく人もいるかもしれない ・釧路産の机を使った小学生も、将来林業に就きたいと思うかも 5. 何のために地元の木材にこだわっているのか話し合うことを通して、丸善木材の営みが釧路だけではなく防災や日本の森林資源を守ることと関連することを考える。 ・釧路の森林受け継ぐ・日本の森林を守る・災害から命を守る	□考えを記述できた児童からキーワードを引き出し、つまづいている児童が考えるきっかけにしていく。 □映像・資料「丸善木材 鈴木さんの話」 ○「釧路産木材を使うこと」と「森林を守る」ことから問いを生み、森林保全のつながりを見出す。 ○林業従事者の一人として鈴木さんが心配している「後継者不足」の問題に焦点を当てる。 ◇林業従事者の取組が間伐材の使用を促し、森林を守ることを関連付けて説明できる。
丸善木材では、森林を守りたい・後継者不足を解消したいという思いから釧路産木材を使っている。		
いかす	6. 本時の学習を振り返り、次時への見通しをもつ。 ・釧路の人にPRしたいだけでなく、森林を守り続けたいという思いで、丸善木材の人たちが釧路産の木材を使う理由がわかりました ・丸善木材の方はかなり大変な思いをされていていいのだろうか？	○丸善木材の方の思いを踏まえ、「鈴木さんへ」という書き出しで本時の学習を振り返るようにする。

第6時は、「私たち（自分）にできること」という社会参画の視点をもとにしながら、線から面へ広げる場面である。第4時、第5時での丸善木材の鈴木さんや釧路市役所産業振興部農林課の神成さんとのやりとりを踏まえ、林業が抱える課題に対する解決策を考える時間とした。始めにこれまでの学びを生かし、「国・地方公共団体（釧路市産業振興部農林課・神成さん）」「企業（丸善木材・鈴木さん）」が行っている取り組みについて整理した。（図2参照）そのうえで、子どもが林業の課題について自分事として考えるきっかけとなるよう、第4時で子どもが記述した、以下のような振り返りを提示した。

・釧路の木は昔の人たちが植え、ずっと大切にしてきた「宝」ということがわかりました。…わたしはこの先、木が20年、30年後になっても守れるように林業に携わる人たちが必要だと思います。わたしは、釧路の木を永遠に守れるように何ができるか、これからの社会で学んでいきたいと思っています。

この振り返りは、森林に携わる方の話を聞き、森林が祖先から受け継がれてきたものである事に理解するとともに、将来にわたって森林を守るために「自分にできる

こと」という視点をもったものである。

この振り返りを共有することで子供たちが自分事として解決策を考える場面へとつなげていった。

オンラインでのやりとりを通して、子供たちが将来的な森林保全に向けて解決策を考える際、「消費者の一人としてできること」「自ら携わること」という2つの視点で子供たちは記述していた。記述には、以下のような傾向が見られた。

- ・「消費者の一人としてできること」を記述している。(4/20人)
- ・「自ら携わること」を記述している。(3/20人)
- ・「消費者の一人としてできること」「自ら携わること」を関連付けて記述している。(11/20人)
- ・関連付けた記述ができていない。(2/20人)

「私たち(自分)にできること」について、子供たちが視点として見出した「消費者の一人としてできること」「自ら携わること」は、まさに社会参画に向けた視点であり、線から面へと広がりをもった視点であると考えられる。この結果から、単元のまとめである第6時において、多くの児童がこの2点に関連付けて記述できていたため、線から面へと広がりをもつことができたと言える。



図2 林業の課題を解決するための関連図
(澤田作成)

5. 考察

授業実践の実際にあるように、釧路市産業振興部農林課の神成さんや丸善木材の鈴木さんと出会いから、第三者からの視点で解決するにとどまらず、自分にできることを踏まえて課題の解決策を生み出す姿が見られた。

第4時～第6時では、授業を進めていく度に自分事になっていく姿が見られ、児童一人ひとりが自分にできることを考える姿が見られた。以下に、釧路市産業振興部農林課の神成さん・丸善木材の鈴木さんとのやりとりを経た3名の抽出児のリフレクションを示す。

- ・消費者の一人としてできること

「私たちの机や、ノート、鉛筆まで釧路の木でできていることがわかりました。釧路の宝物である森林の木を大切に使いたくなりました。」【抽出児A】

- ・自ら携わること

「特に印象に残っているのは、木は手入れをすることで永遠に残っていくことです。木の手入れをする仕事につく人が増えるように、自分にもできることを考えたいです。」【抽出児B】

- ・消費者の一人としてできること・自ら携わること

「私は、釧路の木が何十年も受け継がれているという話が一番心に残っています。一度だけ木を植える体験したことがありますが、一つひとつの木を植えることがとても大変だったことを覚えています。前の世代の林業に携わっていた方たちが一生懸命に植えてくれた木を大切に使いたいです。木を伐るだけでなく、伐ったら植えることを繰り返し、荒れた森林をなくしたいです。将来は林業を支えられるような仕事をやってみたいと思いました。」【抽出児C】

【抽出児A】は「釧路の宝物である森林の木を大切に使用したくなりました。」といった表現に見られるように、生産者の苦勞に思いを馳せ、消費者の一人という自覚をもって解決策を考えていることが読み取れる。また、【抽出児B】は「木の手入れをする仕事につく人が増えるように、自分にもできることを考えたいです。」といった表記から、林業の課題解決に自らできることを考えようとしていることが読み取れる。【抽出児C】は、「将来は林業を支えられるような仕事をやってみたいと思いました。」という表記から、自ら携わりたいという態度が読み取れる。また、「一度だけ木を植える体験したことがありますが、一つひとつの木を植えることがとても大変だったことを覚えています。前の世代の林業に携わっていた方たちが一生懸命に植えてくれた木を大切に使いたいです。」という表現から、自分の体験と関連付けて、思考・判断していることがわかる。

こうしたリフレクションから、神成さん・鈴木さんとの出会いが林業の課題について考える必要性をいっそう強くしたと言える。児童が導き出した「消費者の一人としてできること」「自ら携わること」という視点は、神成さんや鈴木さんとのやりとりを通して学んだ視点であり、釧路市の森林をこれからも守り続けていくために線から面へと広げられた姿であると考えられる。

6. 成果と課題

本研究では、「持続可能な社会づくりの教材開発の視点」

のマトリクスを活用することで、「森林の育成や保護に従事している人々の様々な工夫と努力」と子供たちの関わりについて、「くしろ木づなプロジェクト」のような「地域の木材の需要拡大と循環」を木材産出側、販売・施工業側及び行政までの幅広い関係者が木材利用の促進について情報と認識を共有していることを捉えた。それを単元計画に位置付け、子供たちが地元の木材利用について考えることから、自ら関わろうという態度につなげることができた。

しかし、本研究では単元計画や本時の学習指導案に教材分析で捉えた点から線、面への動きを子供の追究する姿として可視化できていない。子供の考えとして可視化することで、授業者が講じる手立てがより具体的なものになると考えられるため、教材分析と単元計画をどのように関わらせていくか検討する必要がある。

引用文献

- 1) 文部科学省：『学習指導要領 前文』，2017
- 2) 内山隆：『持続可能な社会づくり』のための教材開発の視点』，28，教材学研究第28巻，2017
- 3) くしろ木づなプロジェクト実行委員会：「くしろ木づなフェスティバル2019開催内容」，2019
- 4) 文部科学省：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』，92，2017

注

*1 金子勇は『「地方創生と消滅」の社会学』（ミネルヴァ書房，2016）で汎用性ある地方創生論について、「全体社会の人口減少動態に対して、消滅を克服した地方集落の単一事例を対置するという構図が濃厚であり、日本全体に適用可能な汎用性が得られていない」と述べ、「個性的な優良事例をいかに育てるかは重要だが、単発的な成功事例の紹介だけでは汎用性に富む地方創生論には到達しない」と指摘している。このことは、社会科における教材開発においても重要である。その事例が「持続可能な社会づくり」の典型教材となり得るかを判断する際の視点として、金子の「汎用性に富む地方創生論」を手がかりにできると考えた。

*2 金子勇は、パーソンズの「AGIL図式」を応用している。

A (adaptation)：適応（産業・経済）

G (goal-)：目標達成（政治・行政）

I (integration)：価値規範（地域社会・統合）

L (latent pattern and tension management)：潜在的パターン維持と緊張処理（教育・文化）

これに、金子は「C (communication)：コミュニケーション（交通・通信）」を加えている。

内山(2017)は、これらをもとに「持続可能な社会づくり」の教材開発の視点として「自然環境・生態系・循環」「産業・技術・経済」「政治・行政」「生活・情報教育・文化・芸術・

歴史」「リーダーシップ・中間集団・参加協働」を構想した。

*3 金子は、コミュニティデベロップメント (CD) を提示し、計画的な地域社会の発展の手段と捉えて、地域住民が集まり、地域社会の状況改善と成長を目指す活動として以下のように類型化している。

○成長…経済的・技術的特質面

企業活動、商品とサービスの生産と販売、消費行動の拡充

○改善…社会的・文化的特質面

教育、健康サービス、住宅などの生活環境、政治参加、資源の平等な配分

内山(2017)は、これを踏まえて地域住民の状況改善と成長を目指す「動き」を以下のように位置付けた。

「成長」…経済的・技術的な面で、企業活動、商品とサービスの生産と販売、消費行動の拡充につながったか。

「改善」…社会的文化的な面で、教育、健康サービス、生活環境、政治参加、資源の平等な配分につながったか。

*4 表1のマトリクスの枠にそれぞれ記入し、内容相互の関連を見出し、「成長」や「改善」の動きとして捉えることで、点と点が線となり、線からより広がりをもった面への状況改善と成長が捉えられる。